西田によるヘーゲル生成論批判の射程

熊谷　征一郎

序

西田哲学にとって、最も近い哲学者の一人として、ヘーゲルを挙げることができる。西田とヘーゲルの近さは、西田自身も認めるところである上、日本の哲学研究者の間でも従来よりしばしば指摘されており、ヘーゲルとの類似性ゆえ、なかには西田哲学の独自性を疑問視する向きさえ存する。

しかしながら、西田が「私はヘーゲルに対して多くのいうべきものを有っている」（12-84）と述べていることから、両者の親近性は差異をはらんだ関係であったことを窺い知ることができる。西田は後期哲学において、ヘーゲルとの差異についてしばしば言及するに至るが、主題的にヘーゲル批判を展開したのは、『続思索と体験』（一九三七年）に収められた論文「私の立場から見たヘーゲルの弁証法」（一九三一年）（以下、「ヘーゲル弁証法」論文と略記）においてである。同論文において西田が取り上げるのは、ヘーゲル論理学のなかでは比較的著名な、『エンツュクロペディー』の第一部「論理学」（以下、「小論理学」と略記）において論じられている、「有」と「無」および「生成（Werden）」をめぐる思索である（以下、「生成論」と略記）。同所で、ヘーゲルは、始まりの場面で、事柄がまだ存在していないという意味で「無」であるが、すでにそこに先への進行が孕まれているという意味で、事柄は「有」であると洞察した。それに対して西田は批判を加えたのであるが、その真意は、右のヘーゲルの洞察を以ってしては、すでに潜在しているものが顕現して来

るにすぎず、真に新たに「始まる」ことが成立しないというものであった[1]。

ヘーゲル生成論に代えて、西田が提示した生成論は、事実を顕現となす潜在が無いこと（無底性）によって、事実が自ずから起こるものとして成立し、そこに主体の目覚めが有ると洞察したものであり、右の無底性は、事実が過去からではなく、現在自身のうちから新たに始まるための成立条件という意義をもつものであった。無底性が始まりの成立条件であったのみではなく、有のほうも、無底性によって可能になる、新たな始まりにおいて主体性の目覚めを見出したものであり、総じて、西田生成論は始まりの論理的基礎づけという性格をもつものであった。

しかしながら、ヘーゲル生成論における始まりの事例は、抽象的思惟に不慣れな読者の理解を援けるための方便として、いくつか挙げられた事例のうちの一つであり、必ずしも始まりの事例でなくとも良い代替可能な事例にすぎず、始まりの事例における内容そのものを主張することに力点があったとは言い難かったゆえ、ヘーゲル生成論を以てしては、新たな「始まり」が可能でないという西田の批判は、ヘーゲル生成論における始まりの事例の位置づけを誤認し過大評価したものであり、当を得たものではなかった。

我々に残されている課題は、西田が直接批判を向けた「小論理学」生成論を超えて、より広い視野においてヘーゲル哲学を見た場合、西田の批判および生成論が意義を持ってくるか否かを検討することであり、それが本稿の主題である。そのためには、まず、「小論理学」生成論における始まりの事例に見られた潜在・顕現図式が、ヘーゲル哲学をより広く見た場合、如何なる位置を占めるのかを検討する必要がある。それを、（必ずしも截然とは分かち難いが）第一に、ヘーゲル哲学における、人間の行為を直接主題化したのではない現実一般、あるいは事物の領域において検討し（第一節）、第二に、とりわけ人間の行為の領域に焦点を当てて検討したい（第三節）。そして各々の領域において、「ヘーゲル弁証法」論文以降の西田の思索の展開も解明し、西田の思索がヘーゲルの思索に対して意義を有するかを考究した

い（第二節、第四節）。

一　現実の運動における潜在・顕現（ヘーゲルにおいて）

さて、西田が直接批判の対象としたのは、『エンツュクロペディー』「論理学」の第一部「存在論」における生成論であったが、現実の運動をめぐるヘーゲルの思索において、潜在・顕現に関わるのは、同書「論理学」第二部「本質論」の「C現実性」である。そこでヘーゲルが主題とするのは、表題に示唆される通り、現実の運動がいかなるものであるかである。現存する諸事情・諸条件が滅び去り(2)、そこから一つの新しい現実が出てくる時（EI289）、一見すると、「当の諸事情・諸条件から、ある全く別なものが出てきた」（ibid.）ように見えるが(3)、それに対してヘーゲルは、「別な何ものも成立してくるわけではない。というのは、最初の現実性がそれの本質どおりに定立されるだけだからである」（ibid.）と異を唱える。ヘーゲルは、現存する諸条件は、「何かまったく別のものへの萌芽」（ibid.）を自らの内に含み、新しく生まれる現実性は、最初の現実性の「内なるもの」（EI287）が現れたものにすぎないと捉え(4)、これを「現実性のプロセス」（EI288）全般の運動の構造として見定める(5)。

ヘーゲルは、右の引用文で言われていた「本質」を、「事柄（die Sache）」（EI293）と換言した上で、右の現実の運動を、「自らを〔「可能性」（EI287）から〕現実性へ揚棄していく…事柄のはたらき（Betätigung）」（EI288）とも捉える。このように、現実を、事柄の可能性から現実性への移行と見なす捉え方においても、先述した、新たな現実の出現を、先行する現実の内的本質の定立と見なす捉え方においても、西田が批判した潜在・顕現図式を見て取ることができる。否、と言うよりむしろヘーゲルの所論は、潜在・顕現図式の論理化にほかならない。

以上、取り上げてきたのは、「小論理学」第二部「本質論」「C現実性」であるが、それに対応する『大論理学』の第二巻「本質論」第三篇・第二章「現実性」で展開されている思索も取り上げ検討しておきたい。そこでヘーゲルは、「或る事物の全条件が完全に現存するとき、その事物は現実性の中に入り込む。…事物そのものとは、このように可能的存在であると共に、また現実的存在でもあるものとして規定されているところの内容である」(LII210) と述べている。「即自有〔「可能性」(ibid.)〕が止揚されて、現実性に移行する」(ibid.) と言われていることを考慮するならば、この言葉は、ヘーゲルが、現実の運動を、事物の「可能的存在」から「現実的存在」への移行として捉えていることを示す。或る「実在的現実性」(LII209) は、そこから出てくる他の実在的現実性にとっての「諸々の条件の全体」(ibid.) を成し、他の実在的現実性の「実在的可能性」(ibid.) であって(6)、それが自らを「止揚」(LII210) し、実在的現実性となるという(7)、ここで詳細に展開されているヘーゲルの論理も、具体的には右の事態を指し、それを論理化したものである。『大論理学』現実性論に先立つ、「事物の実存への出現」(LIII119) と題された節において言われていることも同主旨である(8)。

このように、『大論理学』におけるヘーゲルの思索も、「小論理学」における洞察と根本的に異なるものではなく、それを可能性・現実性という概念枠組みで以て精緻に論理化したものであり、可能性の現実化は、潜在の顕現にほかならないゆえ、同書においても、我々は潜在・顕現図式を見出すことができる。

以上、現実性論におけるヘーゲルの思索を解明してきたが、次いで問題となるのは、右のヘーゲルの思索と、西田が直接批判した、ヘーゲル生成論における始まりの事例との連関である。先に論及したように、ヘーゲルは、生成論の中で、始まりにおいて、事柄がまだ存在していないと同時に、すでに存在していると述べていたが、まだ存在していないとは、むろん現実化していないという意味であり、すでに存在しているとは、「始まりは…もうすでに先への進行を見越している」(EI190-191) という意味においてであった。現実性論でも、事柄が、未だ現実性としては存在して

いない時でも、前の現実性において可能性として存在すると捉えられていた。そこまでは生成論と同様であるが、現実性論では、その事柄が、前の現実性の内的「本質」であり、後の現実性は、前の現実性の内的本質がそのまま定立されたものにすぎず、前の現実性と異なるものではないことが主張されていたことを考慮するならば、生成論におけるよりも、事柄が現実化する前の現実性と、現実化した後の現実性との内的連関、および前者から後者への移行の「必然性」（E1289）を主張したものであり、潜在・顕現図式をより確固たるものとなしたと言える。

西田が批判を向けた「小論理学」生成論においては、始まりの事例における内容そのものを主張することに力点があったとは言い難かったゆえ、潜在していたものが顕現して来るのでは真に新たに「始まる」ことが可能でないという西田の批判は正鵠を失したものであったが、「小論理学」現実性論および『大論理学』現実性論において、ヘーゲルは、潜在の顕現を、生成論においてよりも内的必然性を以って、かつ現実の進展全般の中核をなす構造として主張していたのであるから、潜在・顕現図式は、ヘーゲル哲学における一つの根本思想を成すものであると考えられるゆえ(9)、西田の批判が妥当すると言える。

二　現実の運動における潜在・顕現（後期西田哲学において）

さて、『続思索と体験』（一九三七年）に収められた論文「私の立場から見たヘーゲルの弁証法」（一九三一年）において、西田は潜在・顕現図式を批判し、独自の生成論を展開したが、とりわけ『哲学論文集 第二』（一九三七年）の時期頃から、潜在・顕現に関して、しばしば具体的に論及がなされるに到る。以下では、「ヘーゲル弁証法」論文以降における潜在・顕現をめぐる西田の思索を解明した上で、同論文の時期の西田自身の思索との関係、および前節において解明したヘ

ーゲル現実性論との関係と、それに対する意義を究明したい。

後期西田哲学における潜在・顕現の思索において、西田がしばしば論及し、自らの思想を具体化する上で援用するのは、フランスの物理学者ドゥ・ブローイ（一八九二―一九八七）がその著作『物質と光』（一九三九年）の一節において挙げた、プリズムの事例である。それは、無色の光線をプリスムによって分析する以前にも、無色の光線の中に七色があったが、「我々が実験をすれば、現れる」（8・438）という意味で有ったにすぎないという事例である(10)。この事例を手掛かりとしつつ、西田は、「現在に於いて現れるものは、どこまでも有ったものでなければならぬと共に、どこまでも無かったものでならねばならない、新たなるものでならねばならない」（8・576）と述べる。これを潜在・顕現という観点から捉え直すならば、引用文前半は、潜在が顕現するという事態であり、後半は、「無から有が生ずる」（8・438）と換言されていることからも示されるように、潜在していなかったものが現れるという事態であって、この引用文から、西田が、事物の出現には、両側面があると洞察していることを知ることができる。

それではこの洞察は、「ヘーゲル弁証法」論文の生成論における洞察といかなる関係にあるのか。同論文において、西田は、事物の始まりを潜在の顕現として把握するヘーゲルを批判しつつ、事実を顕現となすいかなる潜在も無いことを主張していた。後期哲学で、事物の出現における、潜在していなかったものが現れるという側面は、同論文における思索と軌を一にすると言えるが、後期哲学では、事物の出現には、潜在が顕現するという側面があることも認めていたことから、一見すると、西田はかつての自らの洞察を現実の運動の一側面にすぎないものとして位置づけ直し、ヘーゲルの主張する潜在・顕現図式を、現実の運動の他の側面として認め、両側面の並行的一致を主張しているように見える。

しかしながら右のように解釈するのは速断である。西田は、「歴史的現実は…弁証法的に動き行くと言えば、潜在か

ら顕現に行くとも考えられるであろう。しかし歴史的現実とは…いつもその進行に於いてエネルゲーヤがデュナミスに先立つと考えられねばならない」（8・378-379）と述べている。現実を潜在から顕現への運動として捉える弁証法として、西田が念頭に置いているのは、むろんヘーゲルの弁証法であるが、ここで西田が主張するのは、潜在に対する顕現の「先行性」である。右の「先行性」とは、現実の運動においては「決定の成り行きが予め定まっていない」（8・456）と言われ[11]、「顕現から潜在が考えられる」（8・441）という主旨のことが繰り返し言われていることを手がかりとするならば[12]、何が潜在しているかは予め決まっておらず、顕現した後に、顕現した当の物が、遡及的に過去に投影されることによって、始めて顕現する以前から潜在していたものとして成立することを意味すると考えられる。

後期哲学において、西田は、事物の出現には、顕現から潜在へという側面と、その逆の側面があることを洞察し、後者の側面として、たしかにヘーゲルの洞察を認めたと言えるが、両側面は同等ではなく、前者の側面が後者の側面より先行すると洞察していたことから、ヘーゲル的な潜在・顕現図式を、顕現から事後的に成立する、現実の運動の二次的性格として定位したものであり、現実の事実を決定する潜在は無く、かえって事実が潜在を決定し成立せしめると捉えたことにおいては、「ヘーゲル弁証法」論文の時期の思索を進展させたものだと考えられる。「ヘーゲル弁証法」論文の時期における西田の思索は、新たな始まりを基礎づける意義を有するものであったが、後期の潜在・顕現をめぐる思索は、新たな事物を生み出す、現実の「創造性」の基礎づけという性格を有すると言うことができる[13]。

しかしながらヘーゲル哲学は種々の洞察を含み一筋縄では行かない。『大論理学』第三篇・第三章の因果論においては、西田の思想に近い言説が見られるゆえ、ヘーゲルが同所で展開した思想が西田の思想と同主旨であるか検討せねばならない。ヘーゲルは同所で、例えば湿気の原因を雨に求めるという仕方で、因果関係は、「或る現象を結果と規定し、次にその結果を理解し説明するために、結果からその原因に遡るという…考察」（LII226）だと述べている。この言葉は、

一見すると、ヘーゲルも、西田と同様、顕現の潜在に対する先行性を洞察しているように見える。

しかしながらヘーゲルは因果論においても、原因としての「根源的な事柄」（EI297）が、単なる「可能性」（ibid.）としての自己を揚棄し、自己を自己自身に対する「現実性」（ibid.）として定立したものが「結果」（ibid.）であると述べ[14]、右の事態は、原因としての「根源的な事柄」が必然的に「結果へ移り込んだ」（ibid.）だけであるゆえ、「原因のうちにない内容は結果のうちにもない」（ibid.）と主張していることから、現実性論と同様、因果論の根本基調を成すのも、潜在・顕現図式であることに変わりはない[15]。因果関係を、結果から原因へ遡及する考察だと主張している節の後論においても、ヘーゲルは、些細な事柄が大事件を引き起こしたと見なされることに関して、「その事件の内的精神は、このような原因を必要とはしないはずである。言いかえると、内的精神は現象界に現れて、自己を公開し、啓示するためには他の無数の事柄を使用することができる」（LII228）と述べている。ここで言われている「内的精神」とは、原因としての「根源的な事柄」に相当するが、その内的精神にとって、些細な事柄は、「一つの機縁（eine Veranlassung）」（ibid.）、あるいは「外的誘因（äußere Erregung）」（ibid.）にすぎず、内的精神によってはじめてその「機縁」として規定されると述べていることから[16]、ヘーゲルは、潜在（内的精神）が原因に依存することなく自立的に潜在しており、諸原因よりも存在上、優位にあると捉えていることを知ることができる。西田のように、顕現から、遡及して、内的精神（潜在）が成立するとは洞察していない。したがってヘーゲルが顕現した結果からその原因に遡ると言うのは、我々の認識の順序に関してのみであり、存在が成立する順序に関しては、やはり潜在が先行すると捉えていると考えられる。

顕現が先行すると捉える西田の洞察は、現実の創造性の論理的基礎づけという意義を有することを先に論じたが、西田の洞察の射程を測りつつ、ヘーゲルの洞察に対するさらなる意義を探究するため、イギリスの哲学者マイケル・ダメット（Michael Dummett 1925-）の提示したパラドックスを取り上げたい。むろんダメットは主として戦後に活躍し

た哲学者であり、同事例を挙げた論文が発表されたのは一九六四年であるから、西田自身は知る由もなかったのではあるが、同事例は、その内実において、潜在・顕現をめぐる西田の思索と密接な連関を有する。ダメットのパラドックスとは、或る人がラジオで、「(その人の息子が乗っている)飛行機が、二時間前に墜落した(17)、生存者は僅かである」と聞いたならば、その人は、自分の息子が生存者たちの中に含まれていることを祈るのであり、それは自然なことではあるが(18)、その時点で、息子は死んだか、助かったかのいずれかであり、もし死んだのであれば、祈りは無意味であり、もし助かったのであれば、祈りは余計であるから、いずれにしても祈りは無意味だ、というものである(19)。ダメットは、その人が(例えば遺体を確認する等して)一たび息子の生死を確認すれば、息子が死ななかったことを祈り続けたりはしないであろうことも付言している。

この事例を潜在・顕現という観点から把え直すならば、ラジオを聞いた時点で、息子は死んだか、助かったかいずれかであると考えるのは、顕現(生死確認)する以前にすでに潜在(生または死)が決まっており、潜在が先行するという考え方である。もしそうであるとすれば、たしかに息子が助かったことを祈るのは無意味である。

それに対して、潜在が後行するという西田の洞察からすれば、生死確認する以前には、生または死のいずれとも決まっておらず、確認してみて初めて、確認された当の事態(生または死)が、確認する以前から決まっていたものとして成立するゆえ、事故後であっても、生死確認がなされる以前には、助かったことを祈る余地があり、祈る行為を説明することができる。

以上のように、ダメットが提示した、パラドックス的な遡及的祈りは、潜在が先行するというヘーゲルの洞察を以ってしては不可解であり根拠づけることはできないが、顕現が先行するという西田の洞察によってのみ根拠づけることが可能であり、射程に入れることができる。遡及的な祈りの事例は、ヘーゲルの洞察ではなく、西田の洞察の方こ

そ現実的であることを示すものであり、遡及的な祈りをする時、我々は、西田の論理を身を以て証示するのだと言える。

三　人間の行為における潜在・顕現（ヘーゲルにおいて）

以上、現実一般の運動をめぐる二人の思索を、潜在・顕現という観点から突き合せてきたが、序文で予告したように、以下では、とりわけ人間の行為に焦点を当てたヘーゲルの思索において、潜在・顕現がいかに関わっているかを解明し、西田の批判および後期哲学がいかなる意義を有するのかを検討したい。

まず行為をめぐるヘーゲルの思索において、潜在・顕現に関わるのは、『哲学史』講義の序論において提示される「発展」（Entwicklung）という概念である。発展の事例として、ヘーゲルが挙げるのは、子供は理性的なことを為し得ないし、理性的な意識をもたないが、人間は生まれながらに、理性を素質の形で、あるいは可能性としてもっており、その理性が彼に自覚的となり（für ihn）（GPI40）、「対象」（ibid）的となることによって「現実性」（ibid）をもつに至る、という事例である。この事例に見て取れるように、ヘーゲルの言う発展とは、「素質（Anlage）」（GPI39）、「dynamis〔可能態〕」（ibid.）の状態にあるものが、「現実性」（ibid.）、「energeia〔現実態〕」（ibid.）の状態となることであって[20]、何か新しい内容が出て来るのではなく、前者から後者への、或る事柄の「形式」（GPI40）上の変化に過ぎない。ヘーゲルによれば、発展は、人間における理性に関してのみならず、悟性、想像、意志に関しても妥当するばかりか（GPI39）、生命や意識の全現象など、全てのものにとっての「唯一の真理」（GPI39）であり、世界史の発展でさえ、上記の形式上の区別に帰着する[21]。この洞察は、むろん人間の行為をも射程に入れるものだと考えられるゆえ、ヘーゲルは、人間の行為も潜在から顕現への形式上の変化として捉えていることを窺い知ることができる。

『哲学史』講義の序論における思索は、人間の行為を直接取り上げたものではないが、それを直接取り上げて、潜在・顕現の観点から語ったのは、「小論理学」の現実性論である。そこでは、「はたらき（Tätigkeit）」（EI293）が「人間」（ibid.）の働きとして捉えられた上で、「はたらきは…事柄がその中で即自的に存在している諸条件からその事柄を出して来、そして諸条件がもつところの現存の揚棄によって事柄に現存を与える運動にほかならない」（ibid.）と言われていることから[22]、ヘーゲルは人間の行為を、ある事柄を可能性から現実性へ形式上転化させるものとして把握していると言える。そのことが、さらに敷衍して語られているのは、『精神現象学』の(C)Vの「C即自かつ対自的に実在であることを自覚している個体性」（P292）と題された節においてである。そこでは、個体性が自らの形態を表現しようとする場面が、「日の明るみ（der Tag）」（P293）として規定された上で、次のように言われている。「行為すると言っても、何ものをも変更するのではなく、また何ものに刃向かって行くのでもない。行為するというのは、見られない状態から見られる状態に移すことという全くの形式であるにすぎず、こうして日の明るみにもたらされて表現される内容も、この行為がすでに即自的にそうであるところのものより以外のものではない」（ibid.）。引用文中傍点を付したように、この言葉から、「小論理学」においてと同様、ヘーゲルが行為を、ある内容を潜在から顕現へと「形式」上、推移せしめることだと捉えていることを把握することができる。

「ヘーゲル弁証法」論文において西田が批判した、ヘーゲルの始まりの事例は、事物一般の始まりを主題にしたものであり、人間の行為をも射程に入れ得るものではあったにせよ、直接的には、人間の行為を取り上げたものではなかった。それに代えて提示した西田の生成論は、潜在なき生起として、自ずから起こる事実が成立し、そこに主体の目覚めが有るというものであり、それは、勝義においては人間の行為に主眼を置いたものであったゆえ、事物一般の始まりに関するヘーゲル生成論とは問題とする場面が異なり、厳密には噛み合っていなかった。しかしながら以上解明

したように、西田が批判した当該箇所を超えて、より広くヘーゲル哲学を見た場合には、ヘーゲルは、人間の行為に関しても、潜在・顕現図式で以って捉えていたのであるから、それに対しては西田の生成論は正しく批判的意義を有するものであったとまず言うことができる。

四　人間の行為における潜在・顕現（後期西田哲学において）

西田研究者の間では周知のように、「ヘーゲル弁証法」論文（一九三一年）以降、いわゆる後期西田哲学において、物を作るポイエーシス（制作）という形で、行為が主要な主題となる。先に論及したように、『哲学論文集 第二』（一九三七年）の時期頃から、現実の世界の運動の構造に関して、潜在・顕現という概念枠組みで以って、しばしば論及がなされるに至ったのだが、同時期には、行為に関しても、潜在・顕現という概念枠組みからの論及が見られる。そこで、以下、後期哲学における行為の思索において、潜在・顕現がいかに関わっているかを解明し、ヘーゲルに対するさらなる意義を探究したい。

まず想起すべきは、先に取り上げたプリズムの事例である。同事例を通して西田が言わんとしたのは、現実の運動においては、それまで無かった新しい物（七色の光線）の出現が先行し、事後的に、現れた当の物がすでに有ったものとして成立するということであったが、現実は、人間が何も為さなくとも、右のように自動的に運動して行くのではない。我々が着目すべきは、無色の光線の中に七色の光線が潜在していたのは、「我々が実験をすれば、現れる」という意味においてだと言われていたことである。「実験」には、むろん人間の行為の関与があるゆえ、潜在していなかったものを現わしめるものとして、人間の行為が捉えられていることを窺い知ることができる。

そのことは、人間が物を作るポイエーシス（制作）の場面においてより明瞭になる。西田が、制作を、潜在・顕現に言及しつつ語ったものとして、ベルクソンが『創造的進化』で挙げた画家の事例がある。それは、完成した肖像画は、モデルの容貌や、画家の性格、パレットのうえの絵具から説明されるが、それらについて事前にいかに知っていようとも、肖像画の出来ばえを予見することは、当の画家にも、誰にもできないように[23]、我々も生の各瞬間の作者であり、各瞬間は一種の創造であって、予見不可能だという事例である[24]。この事例は、絵が出来る以前に、いかなる絵になるかは未だ決まっておらず、実地に制作してみて始めて決まることを意味する。このことを西田は、芸術的制作のみならず、現実の世界における行為の本質として捉えているゆえ、西田は、人間の行為を、すでに潜在的に決まっている事物を現実化するものとしてではなく、潜在的に決まっていない事物を実地に臨んで決めてゆく主導性と創造性を有するものとして洞察したと言える。

しかしながらヘーゲル哲学は種々の洞察を含み一筋縄では行かない。先に解明したように、たしかにヘーゲルは行為を潜在から顕現への形式的推移として捉えていたのだが、他方では、『精神現象学』の一節において、西田が援用したベルクソンの画家の事例と類似したことを論じているゆえ、同所では、西田と同様、行為における顕現の先行性を洞察しているか否か検討せねばならない。同所で、ヘーゲルは、行為の「目的」（P296）の「唯一の内容」（ibid.）は、各個体性の「本質」（ibid.）である「特殊的な能力や才能や性格」（ibid.）を現実化することだと捉えている[25]。それらは、意識が「行動」によって現実化し終えた時、初めて意識に対するものとなる[26]。このことに関して、ヘーゲルは、「意識は自分が即自的になんであるかを自分の現実から知るのであるから、個体は行為によって己れを現実にもたらした後でないと、己れのなんであるかを知りえない」（P297）と述べている。この言葉は、個体の本質である、才能や性格等は現実に発揮され顕現した後、始めて知られることを主張したものであり、そこにはたしかに顕現の潜在に対す

る先行性がある。

しかしながらそれゆえにヘーゲルも同所では、西田と同じ洞察をしていると見なすのは速断である。右に引用した二つの言葉が出てくる段落の始めにおいて次のように言われていることに留意する必要がある。「この根源的な本質はただ単に目的の内容であるばかりではなく、即自的には現実でもある、即ち普通には行為の与えられた素材（Stoff）として、前に見出された現実であって、行為することにおいて形成せらるべきであるところの現実として現象してくるその現実でもある」（P296）。引用文中、「根源的な本質」とは、個体の「本質」としての「能力や才能や性格」を言い換えた語であるが[27]、この言葉から、ヘーゲルが、才能等は、行為によって形成されるべき「素材」（Stoff）として、すでに現実に与えられたものであると捉えていることを知ることができる。それゆえヘーゲルにとって行為とは、すでに素材として与えられている才能等を、「表現せられていない存在という形式から表現せられた存在という形式のうちへただ全く移すだけ」（ibid.）にすぎない[28]。さらに、同節の後論において、個体の行為の結果生ずる事物は、個体自身にほかならず[29]、個体は、「自分自身を可能性の闇からこの可能性を現在する昼のうちに、抽象的な即自を現実的な存在の意義をもつものに単に移すにすぎぬ」（P299）と言われていることからも、ヘーゲルが、行為を、（才能等の）潜在から顕現への形式上の移行として把握していることを裏づけることができる。したがって、現実に発揮され顕現した後、始めて潜在していた才能が知られるという先のヘーゲルの洞察は、個体が自らの才能を知る上での順序であり、存在の順序としては、潜在していた才能が顕現するという仕方で、潜在が先行すると洞察しており、西田が画家の事例を通じて主張したように、認識の順序においてのみならず、存在の順序においても、顕現が先行すると洞察したものではないと言える。

しかもヘーゲルのように、画家の潜在する才能や性格の顕現として制作を捉えることには問題が存する。後期西田哲

学で、現実の世界においては、新しい主体が生まれることがしばしば論及されるが、新しい主体とは、新しい「形」、すなわち新しい「生産様式」や「スタイル」で以て働くものである。もし仮に、ヘーゲルが言うように、すでに潜在する才能が発揮されて作品が造られるのみであったとすれば、当の一定の才能相応の作品が再生産されるに終始し、才能そのものが発展することはなく、ましてや新しいスタイルが生まれることもない。画家が自ら作った作品から影響を受けたとしても、当の一定の才能やスタイルがより確固たるものとなるのみである。

その点について、西田は、先に取り上げたベルクソンの画家の事例を踏まえつつ、「画家の才がその作其者によって形成せられる」(2・277)と述べている。この言葉は、潜在・顕現という観点から捉え直すならば、画家が作品を制作する以前に、出来上がる作品相応の才能が、すでに潜在しているのではなく、画家の才能は、造った作品から始めて培われることを意味すると考えられる。このことは、「芸術的創作という如きものに至っては、造られたものが造るものを変じて行くということができる、…造るとともに自己が造られ行く」(7・246)と言われていることからも裏づけることができる。画家の才能の発展、ましてや新しいスタイルの出現は、潜在が先立つというヘーゲルの論理を以てしては成立し得ず、造った作品相応の才能やスタイルが創られて行くという仕方で、顕現が先立つことによって始めて可能となる。したがって西田の洞察は、主体の才能の発展、および新しいスタイルの創造の成立条件という意義をもつと言える。

しかしながら、一見すると、行為に関する西田の洞察よりも、むしろヘーゲルの洞察の方が妥当するように見える事例があるゆえ、最後に同事例を取り上げ、真にヘーゲルの洞察が妥当するか検討しておきたい。その事例とは、ヘーゲル自身が『精神現象学』VI Aの「b人倫的行動 人間の知と神々の知 罪責と運命」(P342)と題された節において挙げるオイディプスの物語である。オイディプスは、老人を父であるとは知らずに殺害し、ある国の先王の未亡人で

ある王妃を母であるとは知らずに妻とする。それをヘーゲルは、オイディプスの知らない他方の側面（老人が父であり、妻が母であるという側面）を、現実が自らのうちに隠しておくことだと捉え、「光を厭うて隠れる威力」（P347）が「待ち伏せ」（ibid.）しており、やがて隠れていた側面が「白日」（P348）のもとに歩み出ることに喩えている[30]。そしてヘーゲルは、「行為とは動かされていないものを動かし、まだやっと可能性のうちに閉じこめられているものを取り出し、こうして意識されていないものを意識されているものに、非存在を存在に結びつける」（P347）ことだと述べている。引用文冒頭の「行為」とは、直接的には、オイディプスが、先王を殺害した下手人（オイディプス自身）を突き止めるべく、先王の殺害現場の唯一の生き証人である家来を召喚し[31]、事の真相を問い質したことを指すと考えられる[32]。それによって、事の真相がすべて明るみとなったことを考慮するならば、右のオイディプスの行為は、顕現に先立ってすでに潜在している事の真相を顕現せしめたのであり、西田の洞察ではなく、ヘーゲルの洞察の方が妥当するように見える。

しかしながら、老人が父であり、妻が母であるという他方の側面が、顕現に先立って、すでに潜在していることを知り得るのは、オイディプスの物語の事の顚末を知っている者である。ヘーゲルがオイディプスの行為を、すでに潜在している真実を顕現せしめたと捉えることができたのも、物語の一部始終を知っていたからこそである。問題となるのは、我々が現実において右の立場に立てるか否かである。後期西田哲学において、我々は世界の外から世界を知るのではなく、世界の中から世界を知るのであり、我々は世界が自らを映す一観点であることが、くり返し言われる。「一観点」という語が示すように、我々の世界認識には、パースペクティブ性があり、物語を読了後の読者のように、完結した全体を、外から、かつ全体的に俯瞰することはできず、顕現に先行して潜在があると言い得る立場には立てない。それゆえ、たしかにオイディプスの行為に関しては、我々は、完結した物語の全体を知る立場に立てるゆえ、そ

の立場から、ヘーゲルの洞察したように、オイディプスの行為は、顕現に先立って潜在している事の真相を顕現させたにすぎないと言い得るが、現実の我々の行為に関しては、完結した全体を知る立場に立てないゆえ、顕現した後、初めて、それが顕現する以前から潜在していたものとして成立するという西田の論理が妥当すると考えられる。

結論

「ヘーゲル弁証法」論文において、西田は、ヘーゲルの洞察を以ってしては、すでに潜在しているものが顕現するにすぎず、新たに「始まる」ことが成立しえないと批判したが、それは、ヘーゲル生成論における始まりの事例の位置づけを誤認したものであり、ヘーゲル生成論に対する批判としては当を得たものではなかったが、西田が批判した当該箇所を超え、ヘーゲル哲学をより広く視野に入れた場合には、ヘーゲルは、「小論理学」現実性論や因果論、および『大論理学』現実性論において、内的本質が可能性から現実性へと定立されることを、現実の運動のプロセス全般の核心をなす構造として洞察していたのであり、それは潜在・顕現図式の論理化にほかならないゆえ、西田による潜在・顕現図式批判が妥当すると言える。

西田は後期哲学において、現実の運動には、顕現したものが潜在するという側面のみならず、潜在が顕現するという側面が存することをも認めるに至った。後者の側面によって、ヘーゲル的な潜在・顕現図式を現実の運動の一側面として位置づけたのだが、前者の側面の先行性を主張することにおいては、「ヘーゲル弁証法」論文と軌を一にし、新たな物を生み出す現実の創造性を基礎づけたと言える。

次いで我々は特に行為に焦点を当てて、広い視野から二人の思索を突き合わせた。ヘーゲル生成論は、事物一般を

主眼としたものであり、直接的には人間の行為について論じたものではなかったのにもかかわらず、「ヘーゲル弁証法」論文において、西田がヘーゲル生成論を批判するかたちで提示した、潜在なき生起として、自ずから起こる事実が成立し、そこに行為的主体の目覚めが有るという生成論は、勝義においては人間の行為に照準を合わせたものであったゆえ、ヘーゲル生成論とは、厳密には問題とする場面が噛み合っていなかったのであるが、広くヘーゲル哲学を見た場合、「小論理学」の中でヘーゲルは、人間の働きを、諸条件のうちに可能性としてある本質をひき出し、本質に現実性を与えるものとして捉えていたのであり、また『精神現象学』においても、行為を、個体の特殊な才能や性格を、可能性から現実性へと形式上推移させることだと把握していた。このことから、ヘーゲルは人間の行為に関しても潜在・顕現図式的によって把握していると言えるゆえ、それに対して西田生成論は正しく批判的意義を有するものであったと考えられる。

我々はさらに「ヘーゲル弁証法」論文以降の、行為をめぐる西田の思索の展開を取り上げた。後期哲学において、西田は、プリズムの事例やベルグソンの画家の事例を通じて、人間の行為を、潜在的に決まっている事物を現実化するものとしてではなく、潜在的に決まっていない事物を実地に臨んで決めつつ造り上げて行く、主導性と創造性を有するものとして捉えていた。西田は、才能の発展や新たな生産様式の出現に関しても、造った物から始めて培われるという仕方で、顕現が先行すると捉えていたが、それらは潜在が先行するというヘーゲルの論理を以てしては成立しえず射程に入れることができなかった。顕現の先行性を主張する西田の洞察は、新たな事物を生み出す現実の運動の創造性を基礎づける論理であったが、行為においても、行為の所産として新たな事物を生み出すのみならず、行為主体自身の才能の発展と、行為の生産様式自体の創出とが可能になる成立条件であり、それらを論理的に基礎づける意義を有するものであったと言うことができる。

たしかにヘーゲルも、西田が援用するベルグソンの画家の例と類似した事例を挙げていたり、因果関係における遡及性を洞察していたが、それらにおける顕現の先行性は、認識の順序における先行性であり、西田のように、存在の順序においても顕現の先行性を洞察したものではなかった。

本稿の序文において、ヘーゲル哲学に対する西田哲学の独自性を疑問視する向きが存することを述べたが、後期西田哲学は、現実の運動には、ヘーゲルが主張した潜在から顕現へという側面のみならず、ヘーゲルが着眼していなかった、顕現から潜在へという側面が存することに光を当て、認識の順序においてのみならず、存在の順序においても、後者の側面の先行性を洞察しつつ、両側面の関係を論理化し、現実の運動および行為の創造性を基礎づけたことにおいて、ヘーゲル哲学とは異なる西田哲学の独自性が存すると言うことができる。

凡例

・西田からの引用は、『西田幾多郎全集』（岩波書店、一九八七―一九八九年）を用い、引用文末尾に巻数と頁数を付した。

・ヘーゲルからの引用は、以下の Suhrkamp 版（一九八六年）により、引用文末尾に略号とページ数を付した。

Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I.（略号 EI）。

Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften II.（略号 EII）。

Wissenschaft der Logik II.（略号 LII）。

Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie I.（略号 GPI）。

Phänomenologie des Geistes.（略号 P）。

訳出に際し、以下の著作を参照したが、訳文を変えた箇所もある。

『小論理学』、真下信一・宮本十蔵訳、岩波書店、一九九六年。

『ヘーゲル大論理学』上巻の一・中巻、武市健人訳、岩波書店、二〇〇二年。

『哲学史』上巻、武市健人訳、岩波書店、一九九六年。

『精神の現象学』上巻・下巻、金子武蔵訳、岩波書店、一九九五年。
・引用文中の〔　〕はすべて引用者による補足であり、引用文中の傍点もすべて引用者が付したものである。

注

（1）西田によるヘーゲル生成論批判の内実とその妥当性および意義に関しては、以下の拙稿で詳論したので参照されたい。「「存在と無の同一」としての「生成」の意味をめぐって」『日本哲学史研究』第八号、日本哲学史研究室編、二〇一一年。

（2）当該箇所を挙げれば、次の通りである。「直接的な諸事情は条件としては滅び去るが、またそれと同時に事柄の内容として保存される。そのとき、人はしかじかの諸事情と諸条件から或るまったく別なものが出てきたと言い、それゆえに、このプロセスであるところの必然性を盲目的と呼ぶ」（EI289）。

（3）前註に掲げた引用文の後半に基づく。

（4）当該箇所を示せば、次の通りである。「われわれが或る事柄の諸条件を見てみるとき、…そのような直接的現実性は何かまったく別のものへの萌芽を自身の内に含むのである。この別なものは当初は単に一つの可能的なものにすぎないが、しかしやがてこの形式は自己を揚棄して現実へ変移する。そのようにして生まれるこの新しい現実性は、それが使い果たすところの直接的現実性自身の内なるものである。そのようにして事物の或るまったく別な姿が成立してくるのであって、別な何ものも成立してくるわけではない。というのは、最初の現実性がそれの本質どおりに定立されるだけだからである」（EI287）。

（5）本文中に掲げた引用文に続けて、ヘーゲルが、「このようであるのが総じて現実性のプロセスである」（EI288）と述べていることに基づく。

（6）当該箇所を示せば、次の通りである。「或る事物の可能性を構成するところのこの現実性は、この現実性自身の可能性ではなくて、むしろ或る他の現実的存在の即自有なのである。この現実性は、それ自身止揚さるべき現実性であって、単に可能性にすぎないものとしての可能性である。――この意味で、実在的可能性は諸々の条件の全体を構成する。…しかしこの現実性は即自有であり、しかも他者の即自有であり、従って自己に復帰すべきもの

だという規定をもっている」(LII209)。

(7) 前註に掲げた引用文、および次の引用文に基づく。「この実存はまた可能性、或いは即自有としても規定された。もっとも、或る他者の即自有として。それゆえ、自己を止揚するということは、この即自有も止揚されて、現実性に移行するということである」(LII210)。

(8) 同節において、「或る事物のすべての制約が現存するとき、その事物は実存となる。事物はそれが実存する以前にも有る」(LIII22)と言われているが、「実存する以前にも有る」とは、可能的存在として有ることを意味するゆえ、この言葉も、可能的存在としてすでに有る事物が、現実的存在となることを主張したものである。

(9) 次節で取り上げるように、「小論理学」因果論においても、潜在・顕現図式を見出すことができる。

(10) 当該箇所を示せば、次の通りである。「プリズムによる分析の前に無色の光線の中に七色があったと言えば、あった、しかしそれは我々が実験をすれば、現れるという意味においてあったのである」(8・438)。

(11) 当該箇所を示せば、次の通りである。「従来の因果律によって考えられるように、潜在が顕現に先立ち、顕現と否とに関せず、物が潜在的に存在するということではない。…ヨルダンは、量子力学において……自然そのものに於いて決定の成り行きが予め定まっていないのであると言っている…。ラプラスの精神というものがあっても、予知することはできない」(8・456)。

(12) 一例を挙げるならば、「潜在的なものは、顕現的なものの反映である」(8・444)、「無色の光線の中に七色の光線があったか、有った、しかしそれは分光器分析によって現れるという意味において有ったのである。…過去が未来から作られるのである」(11・128)と言われている。

(13) 「歴史的実在界というのは、すでに有ったものが現れるというのではなくして、創造的でなければならない」(8・276)と言われていることから、顕現の先行性を説く西田の洞察は、現実の世界の「創造性」を論理的に基礎づける意義を有するものであると言える。

(14) 当該箇所を示せば、次の通りである。「実体は…根源的な事柄であるが、しかしまた同様に、それは…自己のたんなる可能

性を揚棄し、自己を自己自身にたいする否定的なものとして定立し、こうして或る結果（Wirkung）をもたらし出す。結果はそういうわけで、単に一つの定立された現実性であるにすぎないが、しかしはたらき（Wirken）のプロセスを通じて同時に必然的でもあるような現実性である。このように見るかぎり実体は原因である」（EI297）。

（15）『大論理学』第三篇・第二章「現実性」における現実性論と、同篇・第三章「B因果性の相関」における因果論の内実に、親近性があることに関しては、すでに先行研究において指摘されている。髙山守『ヘーゲルを読む』放送大学教育振興会、二〇〇三年、二四四頁。

（16）当該箇所を挙げれば、次の通りである。「むしろこれらのそれ自身としては些細な事柄や偶然的なものは逆に内的精神によってはじめてその機縁として規定されるのである」（LII228）。

（17）ダメット自身の挙げる事例は、船の沈没事故であるが、生死を分ける瞬間があったほうが話が単純化され、ダメットの主張の主旨を把握しやすくなるため、本稿では飛行機事故に置き換えた。（置き換えた理由に関しては述べていないが）先例として、中島義道が大森荘蔵との対談のなかで、やはり飛行機の墜落事故に置き換えている。大森荘蔵、中島義道、対談「過去は幻か」『現代思想』青土社、一九九三年、七五頁。

（18）当該箇所を示せば、次の通りである。「私がラジオで、二時間前大西洋で船が沈没した、生存者は僅かである、と聞いたと想像せよ。私の息子がその船に乗っていた。そこで私は直ちに、かれが生存者たちの中にいるように、かれが溺死しなかったように、と祈る。これはこの世でもっとも自然なことである」（335-336）。ダメットからの引用は右の著作により、引用文末尾にページ数のみを記した。

Michael Dummett, *Truth and Other Enigmas*, Harvard University Press Cambridge, Massachusetts, 1978.

訳出に際して次の訳書を参照したが、訳文を変えた箇所もある。マイケル・ダメット『真理という謎』藤田晋吾訳、勁草書房、一九九六年。

（19）当該箇所を示せば、次の通りである。「誰かが私にこう言ったとせよ。「あなたのご子息は溺死したかしなかったかのいずれかである。もし溺死したのならば、どう見てもあなたの祈りはかな

えられないでしょう。もし溺死しなかったのならば、あなたの祈りは余計なことでしょう。ですから、いずれにしてもあなたの祈りは的外れなことなのです」(338)。

(20)当該箇所を示せば、次の通りである。「発展がどういうものであるかを理解するためには、二種のいわば状態が区別されねばならない。第一のものは、素質(Anlage)、能力(Vermögen)、私流に言って、即自有(potentia,dynamis)として知られているものである。第二の規定は、対自有、現実性(actus,energeia)である」(GPI39)。右のように言われた後、子供の理性の事例が挙げられていることから、ヘーゲルの言う発展とは、前者の状態が後者の状態へ到ることであると言える。

(21)当該箇所を示せば、次の通りである。「即自的に理性的である人間はそれが対自的に理性的となった後も別に進展したのではない。即自的なものは、存続するのだが、しかし区別は大きい。何ら新しい内容が出て来たのではない。けれども、この形式は大変な相違である。世界史の発展の全区別は、この区別に帰着する」(GPI40)。

(22)当該箇所を示せば、次の通りである。「はたらきは(α)このものもまたそれだけで存在するもの(或る人間、或る性格)であり、自立的に現存するものであると同時に、それはそれの可能性をただ諸条件と事柄においてのみもつ。(β)はたらきは諸条件を事柄へ転じ、後者を現存の面としての前者へ転じる運動である。というよりむしろ、事柄がその中で即自的に存在している諸条件からその事柄を出して来、そして諸条件がもつところの現存の揚棄によって事柄に現存を与える運動にほかならない」(EI293)。

(23)Henri Bergson, *L'évolution créatrice*, p.u.f., 2007,p.6. 訳出に際しては次の訳書を参照したが、訳文を変えた箇所もある。『創造的進化』松浪信三郎、高橋允昭訳、ベルクソン全集　第四巻、白水社、一九六六年。

(24)ibid., pp.6-7.

(25)当該箇所を示せば、次の通りである。「このように個体性の根源的に限定せられた自然、個体性の直接的な本質も最初にはまだ行為するものとして定立せられていないが、このときには、この自然はそれぞれの個体性の特殊的な能力(Fähigkeit)や才能(Talent)や性格などと呼ばれる。そこで精神のこの特殊の色合いが目的そのものの唯一の内容と見なさるべきであり、また全くた

だこれのみが実在と見なさるべきである」(P296)。

(26)当該箇所を示せば、次の通りである。「むろん、この根源的な内容は意識がこれを現実化し終えたときに初めて意識に対してあるに相違ない、…もっとも意識が即自的になんであるかが意識に対してあるようになるには、意識は行動しなくてはならない」(P296)。

(27)前々註に掲げた引用文に基づく。

(28)当該箇所を示せば、次の通りである。「行為とは表現せられていない存在という形式から表現せられた存在という形式のうちへただ全く移すだけのことである」(P296)。

(29)当該箇所を示せば、次の通りである。「個体の為すことがなんであろうと、また個体の身に起こることがなんであろうと、それを為したものは個体であり、またそれが個体自身である」(P299)。

(30)当該箇所を示せば、次の通りである。「現実は知ることにとっては無縁である他方の側面を自分のうちに隠しておくのであり、自分が即且つ対自的にいかにあるものかを意識には示さないのであり、――息子は侮辱者を撲殺するが、この息子に侮辱者が父であることを現実は示さないし、――また彼は王妃を妻として娶るのであるが、この王妃が母であることをも現実は示さないのである。このような具合に人倫的な自己意識には光を厭うて隠れる威力が待ち伏せをしているのであるが、この威力は行為が出来したときに初めて出現してきて、自己意識を現行犯で捕まえるのである」(P347)。

(31)ソポクレス『オイディプス王』藤沢令夫訳、岩波書店、二〇〇五年、八三頁。

(32)同書、一〇三－一〇九頁。